

○鈴木さんインタビュー

鈴木さん「私たちが子供の頃、昭和40年前

ですけれども、ここいらはまだ農業機械が入っていないくて、ほとんど手作業あるいは畑、田んぼを耕すにも、牛、馬、要するに家畜を使った農業が主体にだったわけでございませう。それからやはり広大な面積を田植えするなり、稲刈りをするには人手を求めなくてはならないこともありまして、農繁期には一時の託児所、あるいは共同炊事場、そういう形で自然とこの地区はつながり、結いの精神が強くなったとこのように感じております」

○トラクターの鈴木さん

○鈴木さんインタビュー

○ふれあい農業交流・田植え

営農組合の組合長をしている鈴木さんが、力を注ぐのは、失われゆく農村文化の伝承。その一つが、ふれあい農業交流事業です。

○田植えをする子供たち

鈴木さん「農家の家にながら、田植え、稲刈りをしたことがないというような子供たちが多いし、それから若いお父さん、お母さんたちも、そしてこの地域に住んでいる非農家の方々も、そういう体験をさせながら昔の個人の農業文化を伝承しようじゃないか、それからまた食料の安心、安全をやはり肌で感じてもらおう、そしてまたそういう環境を自ら作っていくというふうなことも考えましたし」

○農具の説明をする様子

○天秤籠の説明をする鈴木さん

鈴木さん「子供たちが、田植えの時は、手伝う役割りがあつて、田んぼで年寄りの方々、大人の方々が、苗を取ったのを、この籠に入れてそして、子供たちがこれに入れて、今みたいにトラックとかない時代は、田植えしている田んぼに、これを担いで行って、そしてさつき皆さんが苗を投げたように、ここから田植えをしている方に、こう苗を投げてやる仕事の子供の、田植えの時の大切なお手伝いでし

<p>○子供を田植え機に乗せる 阿部さん</p> <p>○動いている田植え機ロング</p> <p>○見ているお年寄り</p> <p>○阿部さんインタビュー</p> <p>○会食の人々</p> <p>○高橋さんが唄う</p> <p>○用水路の清掃</p>	<p>た」</p> <p>鈴木さんを助けながら、ふれあい農業交流事業の手伝いをしているのが、阿部さんです。</p> <p>阿部さん「最初計画があがった時は、かえって父兄の方たちや子供たちに迷惑をかけてしまうんじゃないかと、いっぱい行事がありますんで、お子さんとか一人の方忙しいですんでね、実際やってみましたらば、すごく楽しんで頂けまして、やってよかったなと思っておりますし、それを通じて世代の交流も前よりもずっと生まれまして、皆さん喜んでいただけましたね」</p> <p>子供からお年寄りまで、世代を超えた地域ぐるみの交流。</p> <p>子供たちのために、最長老のお年寄りが昔の田植え唄を披露してくれました。</p> <p>(田植え唄)</p> <p>ふふ、素敵な歌声でしたよ。</p> <p>7月下旬、地域の人々が力を合わせて、用水路の清掃に励む姿がありました。</p> <p>人々が互いに支え合い、助け合う結いの精神が、ここにはしっかりと息づいています。</p>
<p>(4) 胆沢の夏</p> <p>○夏の焼石連峰</p> <p>○及川さんの家</p>	<p>夏の焼石連峰。</p> <p>麓の胆沢平野。</p>

○ひまわりの収穫

切花用ひまわりの出荷に追われているのは、  
及川久仁江さんです。  
ひまわりの他にストックの栽培や  
トマトピュレなども作っています。

○ひまわりの出荷作業

この土地に生まれ、  
この土地で育った及川さん。  
大好きな地元の良さとはなんでしょうか。

○及川さんインタビュー

及川さん「結局小さい頃からずっと一緒に生活  
っていうか一緒にいて、死ぬまで一緒に地  
域に暮らして行くというのを、大きな家族  
みたいな感覚で、かなり昔に比べればすかす  
かしているんですけども、でもそこがいい  
所なのかなっていう、何かあったら力になっ  
てもらおうみたいな、地域間っていうか人と人  
のつながりみたいのが・・・

○ひまわりの収穫作業

薄れているというのは凄く感じるんですよ、  
だから元に戻るんじゃないんだけど、  
さらなる進化っていうか新しい昔をめざして  
いるというか、それをだから旦那とはすごく  
模索していますね。どうやったここで一緒に  
生きてここで死んでいけるかなってというのは  
自分たちがやることによって子供たちもそれ  
を見て、孫たちもひ孫たちもっていうように  
良い形っていうか、良い空気を作ってから、  
あの世に行きたいみたいな」

○及川さんインタビュー